

# 厚木飛行場周辺における 環境状況調査について

令 和 2 年 9 月  
南 関 東 防 衛 局

## 1 調査概要

- 空母艦載機の岩国飛行場への移駐については、平成29年8月9日から開始され、平成30年3月30日に、全ての空母艦載機の移駐が完了したところです。

### 【各部隊の移駐状況】

- 平成29年8月9日 E-2D（5機）の部隊が移駐
- 平成29年11月28日 F/A-18の2部隊（約24機）及びEA-18Gの部隊（約6機）が移駐
- 平成29年12月3日 C-2の部隊（約2機）が移駐
- 平成30年3月28日～30日 F/A-18の2部隊（約24機）が移駐

- 厚木飛行場においては、海上自衛隊の航空機部隊及び米海軍のヘリ部隊等が引き続き使用し、移駐した空母艦載機等の飛来もあることから、空母艦載機移駐前後の同飛行場の運用状況は変化している状況です。
- この様なことから、厚木飛行場周辺における空母艦載機移駐前後の飛行回数及び騒音状況について分析を行うための調査を実施しました。



## 2 調査内容

### (1) 飛行回数調査

- 厚木飛行場における飛行実績（平成28年4月1日～令和元年6月30日）を基に、以下について整理、分析しました。
  - ① 月毎の飛行回数の変化
  - ② 固定翼機（自衛隊機と米軍機）の飛行回数
  - ③ 固定翼機（自衛隊機と米軍機）の飛行割合

### (2) 騒音状況調査

- 国が厚木飛行場周辺に設置（23箇所）している航空機騒音自動測定装置の測定結果（以下、「騒音測定結果」という。）を基に、空母艦載機移駐前後（平成28年4月1日～令和2年3月31日）の騒音状況を整理、分析しました。

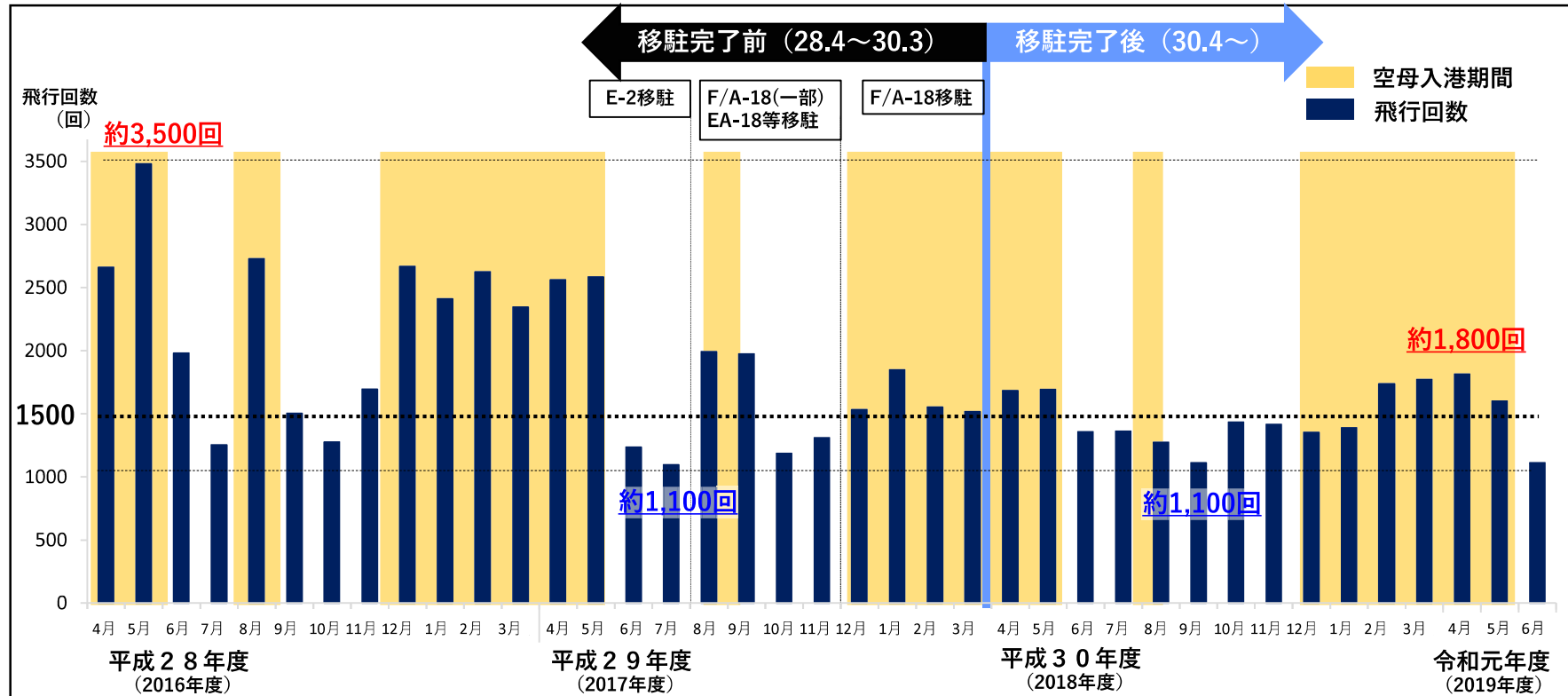
### 3 調査結果

#### (1) 飛行回数調査（対象期間：平成28年4月1日～令和元年6月30日）

##### ① 月毎の飛行回数の変化

厚木飛行場を離着陸する**全ての航空機の飛行回数**の推移を比較したところ、

- 移駐完了前は、月毎に飛行回数が大きく変動していましたが、移駐完了後の飛行回数は減少し、概ね一定に推移（1,500回程度）していました。
- 月毎の飛行回数について、移駐完了前で最も多い月は平成28年5月（約3,500回）、最も少ない月は平成29年7月（約1,100回）でした。また、移駐完了後で最も多いのは平成31年4月（約1,800回）、最も少ない月は平成30年9月（約1,100回）でした。
- また、移駐完了前の空母が入港している期間は、飛行回数が多くなる傾向でした。



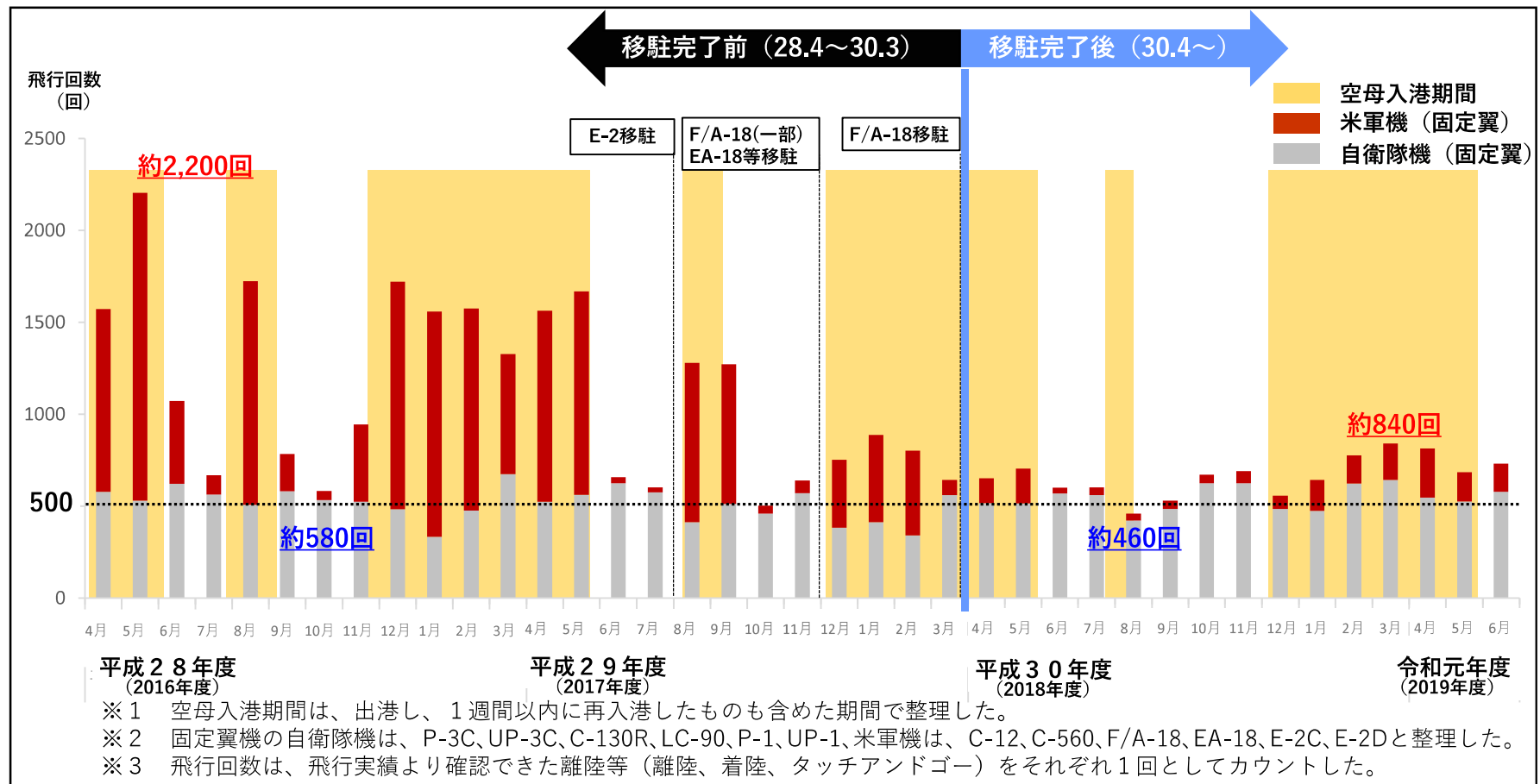
※1 飛行回数は、飛行実績より確認できた離陸等（離陸、着陸、タッチアンドゴー）をそれぞれ1回としてカウントした。

※2 空母入港期間は、出港し、1週間以内に再入港したものも含めた期間で整理した。

## ②固定翼機（自衛隊機と米軍機）の飛行回数

厚木飛行場を離着陸する固定翼機の自衛隊機と米軍機の飛行回数の推移を比較したところ、

- ・ 移駐完了前は、米軍機は月によって飛行回数が大きく変動していましたが、移駐完了後の米軍機の飛行回数は大きく減少し、少ない飛行回数で推移していました。
- ・ 自衛隊機の飛行回数は大きな変動はないものの、相対的に月の飛行回数の中に占める割合が上昇し、移駐完了後においては飛行回数のほとんどを自衛隊機が占めていました。



### ③固定翼機（自衛隊機と米軍機）の飛行割合

厚木飛行場を離着陸する固定翼機の自衛隊機と米軍機の飛行割合の推移を比較したところ、

- 固定翼機については、移駐完了前（平成28年度）よりも移駐完了後（平成30年度）の割合が低くなっている状況でした。（28年度：約18,100回⇒30年度：約9,900回）
- 米軍機（ジェット機）については、移駐完了前（平成28年度）よりも移駐完了後（平成30年度）の割合が低くなっている状況でした。（28年度：約7,700回⇒30年度：約340回）

| 区分    | 年度                    | 飛行回数     | 固定翼機    |       |               |       |               |       |                     | 回転翼機等<br>（※5） |      |
|-------|-----------------------|----------|---------|-------|---------------|-------|---------------|-------|---------------------|---------------|------|
|       |                       |          | 自衛隊（※1） |       | 米軍（※2）        |       |               |       | その他<br>左記以外<br>（※4） |               |      |
|       |                       |          | 常駐機     |       | 常駐機           |       | 外来機           |       |                     |               |      |
|       |                       |          | ジェット機   | プロペラ機 | ジェット機<br>（※3） | プロペラ機 | ジェット機<br>（※3） | プロペラ機 |                     |               |      |
| 移駐完了前 | 平成28年度<br>（28.4～29.3） | 約26,600回 | 約68%    | 約6%   | 約18%          | 約29%  | 約6%           | —     | —                   | 約9%           | 約32% |
|       | 平成29年度<br>（29.4～30.3） | 約20,400回 | 約67%    | 約12%  | 約17%          | 約18%  | 約4%           | 約3%   | 約1%                 | 約12%          | 約33% |
| 移駐完了後 | 平成30年度<br>（30.4～31.3） | 約17,600回 | 約56%    | 約18%  | 約18%          | —     | 約5%           | 約2%   | 約1%                 | 約12%          | 約44% |
|       | 令和元年度<br>（31.4～元.6）   | 約4,500回  | 約56%    | 約18%  | 約18%          | —     | 約10%          | 約2%   | 約1%                 | 約7%           | 約44% |

※1 自衛隊の常駐機は、P-3C、UP-3C、C-130R、LC-90、P-1、UP-1を対象とした。

※2 米軍の常駐機及び外来機は、C-12、C-560、F/A-18、EA-18、E-2C、E-2Dを対象とした。

※3 平成29年度から一部移駐が開始されているため、米軍のジェット機は、移駐期間中（平成29年11月28日から30年3月29日までの間）は、飛行回数の半分を常駐機、残り半分を外来機として整理した。

※4 その他は、※1及び2以外の自衛隊機、米軍機、海上保安庁機、民間機を対象とした。

※5 回転翼機等は、自衛隊及び米軍の回転翼、海上保安庁機、県警機、民間機等を対象とした。

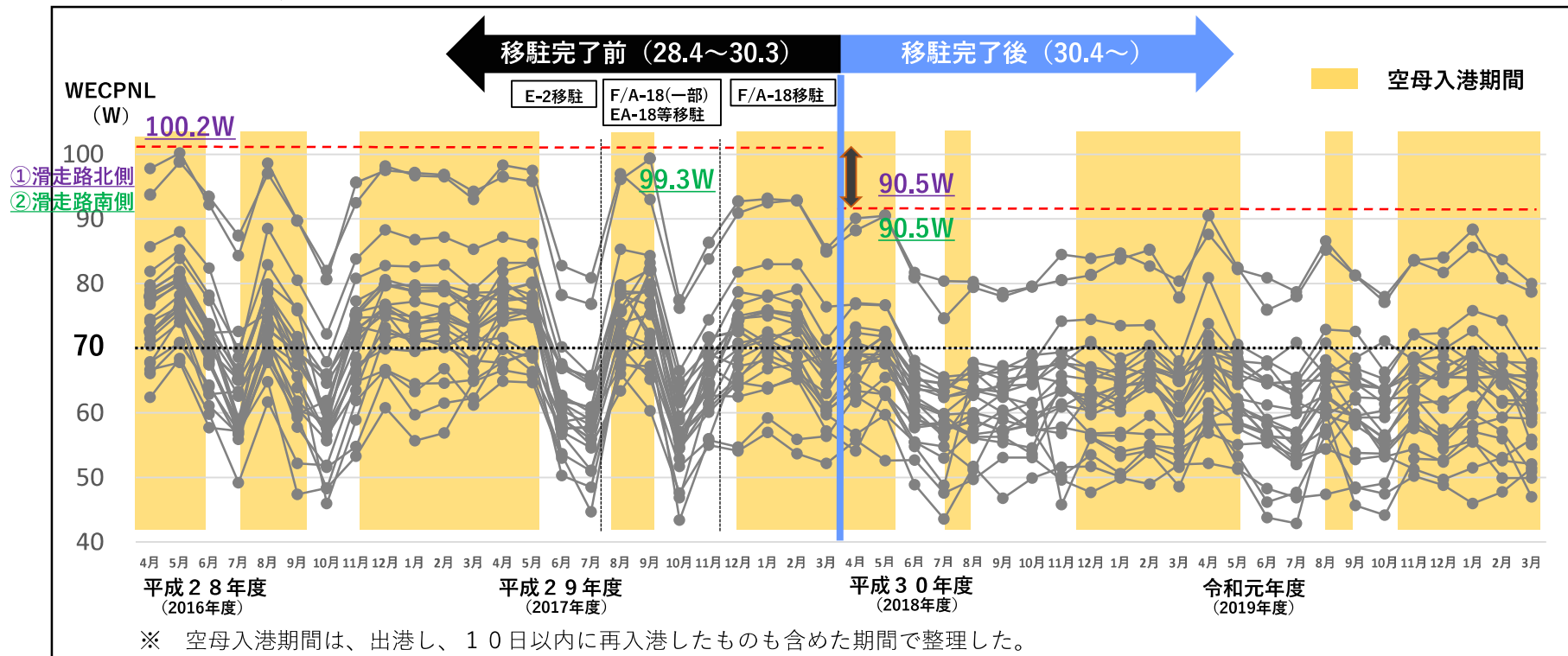
※6 飛行回数は、飛行実績より確認できた離陸等（離陸、着陸、タッチアンドゴー）をそれぞれ1回としてカウントした。

## (2) 騒音状況調査（対象期間：平成28年4月1日～令和2年3月31日）

騒音測定結果を基に移駐前後のWECPNL(注1)の推移について比較したところ、

- 移駐完了前のW値は、月毎に大きく変動していましたが、移駐完了後は、概ね一定に推移し、更に、移駐完了後の年間W値は、移駐開始前（平成28年度）より全ての測定地点で減少していました。（別紙1及び2参照）
- 滑走路北側及び南側における年間W値は、移駐前後で約10W程度減少(※)していました。これは、移駐完了後の米軍機の飛行回数が減少したことにより、騒音発生回数が減少し、騒音評価への影響が大きい100 dB以上(注2)の騒音発生回数が減少したことによるものと考えられます。（100dB以上の騒音発生回数：【北側】28年度:約3,600回⇒30年度:約190回、【南側】28年度:約3,300回⇒30年度:約160回）

※ 一般的に、10Wの減少とは、1日の騒音発生回数が10分の1となる場合や騒音の強度（1日に観測される全騒音レベルの最大値の平均値）が10dB（デシベル）減少する場合などです。

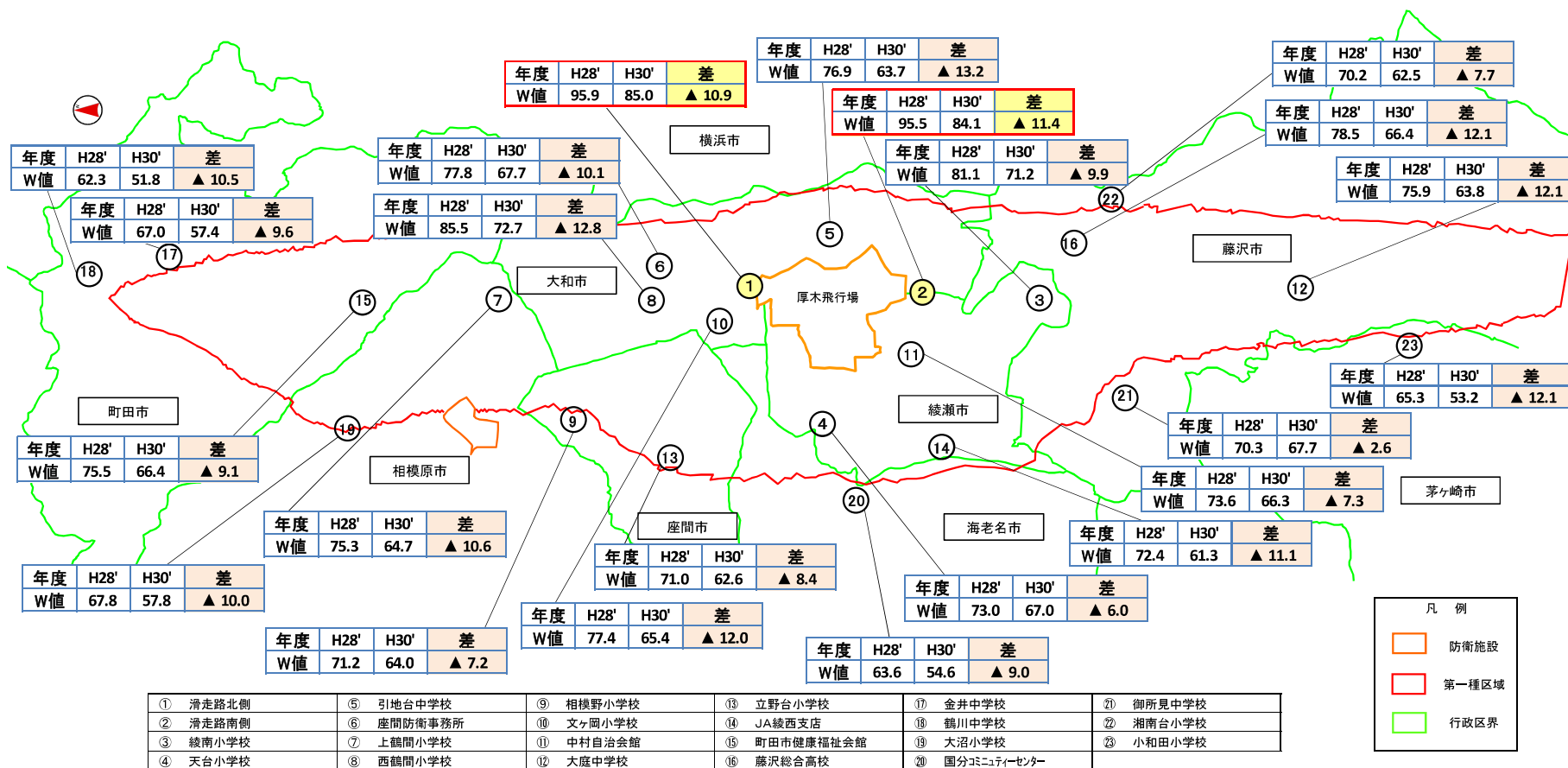


※ 空母入港期間は、出港し、10日以内に再入港したものも含めた期間で整理した。

注1 WECPNL（加重等価継続感覚騒音レベル）は、航空機騒音の「うるささ」を表す単位であり、音響の強度、頻度、継続時間、発生時間帯等の諸要素により、多数の航空機から受ける騒音の総量（総暴露量）を1日の平均として総合的に評価したものである。

注2 100 dB（デシベル）は、例えば、「電車が通る時のガードの下」の音である。

## 空母艦載機移駐前後の航空機騒音自動測定結果の推移 (平成28年度と平成30年度)

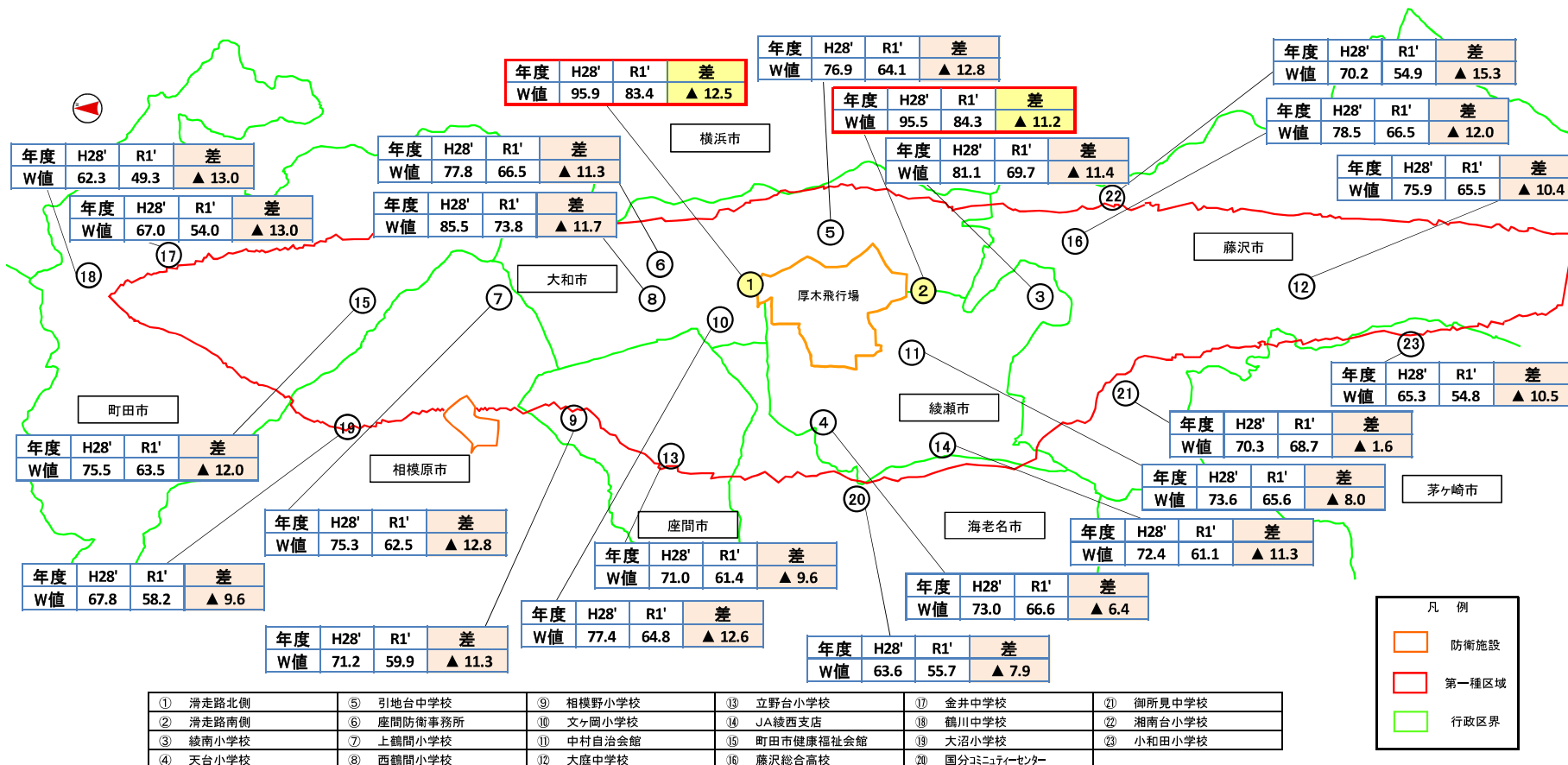


※ 1 W値は、各年度の年間W値である。  
 ※ 2 No20については、平成30年度において一部欠測期間（8ヶ月）があり、参考値である。

【南関東防衛局ホームページ（<https://www.mod.go.jp/rdb/s-kanto/>）において、平成17年度以降の各測定地点の日毎、月毎、年毎の航空機騒音自動測定結果を確認できます】



## 空母艦載機移駐前後の航空機騒音自動測定結果の推移 (平成28年度と令和元年度)



※1 W値は、各年度の年間W値である。  
 ※2 No16については、令和元年度において一部欠測期間（6ヶ月）があり、参考値である。

【南関東防衛局ホームページ（<https://www.mod.go.jp/rdb/s-kanto/>）において、平成17年度以降の各測定地点の日毎、月毎、年毎の航空機騒音自動測定結果を確認できます】